

# 北日本漁業経済学会 ニュースレター

北日本漁業経済学会大会

## 第33回 網走大会のお知らせ

\* \* \*

【第1日目：シンポジウム】

日時：2004年 8月 26日(木) 9:30～17:00

場所：網走市オホーツク・文化交流センター(エコセンター2000)

：網走市北2条西3丁目3番地 TEL.0152-43-3704

共通テーマ「水産物産地加工業経営の動向と課題」

コーディネーター：廣吉勝治(北大大学院水産科学研究科)

〔講演〕

1. 道内産地加工の特質と形態再編の方向

廣吉勝治(北大大学院水産科学研究科)

2. 産地加工の基盤と経営動向

廣田将仁(青森県下北ブランド研究開発センター)

3. 末端流通の立場からの提案－水産MDの教訓と展開－

川崎真二(コープさっぽろ水産商品部長)

4. 網走市内水産加工業の現状と課題

田中弘(網走地方卸売市場買受人組合・組合長理事、  
株・林コメ田中水産社長)

5. 水産基地における加工展開の諸相－新たな試みの実例等－

乾政秀(株式会社・水土舎)

6. 食品加工業の動向と展望－「フードシステム研究」の立場から－

芝崎希美夫(酪農学園大学食品流通学科)

討論司会：馬場治(東京海洋大学国際文化政策学科)

三木克弘(中央水産研究所水産経済部)

\* 終了後、懇親会：18～20時(網走ビール館2F)

<参加自由：但し、当日資料代として1,000円申し受けます>

**【第2日目：一般報告(自由論題・会員の通告に基づく)】**

**日 時： 8月27日(金) 9:30 ~ 17:00**

**場 所： 同 上**

\* 学会総会を午後の冒頭に開催します。

**【シンポジウム開催の主旨】**

去る4月開催の春季研究集会(札幌市)でのミニ・シンポの示唆を得つつ表題のようなテーマとしました。

今日、漁業・養殖業生産の持続的発展という課題は、加工業展開との一体性において検討してみるべきであると考えます。水産加工の特徴である「産地加工」は水産品需給関係の再度の変化のもとで、業態再編、製品多様化など存立条件は厳しく加工業経営の様相も大きく変貌しつつありますが、消費者を味方に付け、地域漁業の活性化の課題とも係わりつつ伸びていく方向を見据えていくことに関して吟味・検討をする必要があると思います。

(コーディネーター：廣吉勝治)

**【一般報告を募集します】**

(1) 8月27日(金)開催の一般報告を募集します。

一般報告をされる会員は、8月10日(火)までに必着で演題と報告要旨を送って下さい。字数は1200字以内、図表を付ける場合はそのまま印刷しますので、メール送信か、きれいなものを送付して下さい(メール送信を希望しますが、〒orFAX送付も可)。

メール・アドレス：FZW02260@nifty.com

TEL.&FAX.:0138-40-8835

〒041 - 8611函館市港町3-1-1 北大大学院水産科学研究科内

(北日本漁業経済学会事務局)

(2) 発表当日に資料等を配布される場合は、60部程度ご用意下さい。OHP, パワーポイント等使用の場合は、要旨送付の際に指示して下さい。発表時間は質疑を含め25 ~ 30分程度です。発表時間も希望があれば伺いますが、希望通りにならないこともあります。

**【事務局からのお知らせ】**

\* 理事会は、同場所で8月25日(水)17:30 ~ 19:00を予定しています。役員の皆さん、欠席の場合はご一報を。現地事務局は、佐藤 一理事です(道立網走水試：TEL0152-43-4592)。

\* 新入会員の紹介(敬称略)

\* 退会者(団体会員)

小川砂郎(神奈川県水産総合研究所企画経営部)

北海道指導漁業協同組合連合会

大中 実(株・アイフィッシュ)

新田時也(東海大学海洋学部)

\* 2003年度で2004年度以降の会費の前納をされている会員諸氏：氏名を公表してお礼に代えさせていただきます。(6月末現在) 敬称略；上田不二夫、小野寺五典、川本範治、小岩信竹、坂本文男、二平 章、宮澤晴彦、宮田 勉

## 2004年春季研究集会(4.26「産地加工」ミニシンポ)に参加して

廣田将仁(青森県ふるさと食品研究センター)

今年度の春季研究集会は4月26日、札幌市において「道内産地加工の現状と課題に関する諸論点」をテーマとして開催された。この場での議論は8月開催予定の第33回大会のシンポジウムテーマ「水産物産地加工業経営の動向と課題(仮題)」への布石となるものと考えられる。報告の内容については既に新聞掲載<sup>注1</sup>されているためここでは省略し、議論されたものを踏まえてあくまで私自身の視点によった感想を記してみたい。

当研究集会では秋谷重男氏が司会を務め、北大、道漁連、道加工連そして中央卸売市場仲卸という異なるそれぞれの立場から報告が行われ、北海道水産加工業にかかわる多面的な問題提起とその評価について体系的な議論が期待された。

就中、廣吉氏は第一報告において産地機能・漁業生産と一体化し展開してきた産地加工の特質に改めて留意し、道内加工業でも脱産地の方向へとすすむ一方、依然として漁業と加工が相互関係を持つ事実を鑑み、脱産地の現象だけにとらわれず産地加工の内実を多面的に再検証すべきとの意図を提示したように思う。このことは事実として地域のみならず国境までも股にかける加工企業の動きや、その一方でかつての産地集積効果が失われるなど今日の水産加工業研究の諸課題に向かい合う上でまず必要となる。言葉を換えると経営をとりまく環境変化に適応するのに必要なものは何なのか、その一方でこれを打ち消してしまう制約は何だったのかということ考える契機ともなるはずである。

さて、今回のテーマである北海道水産加工業の直面する問題について現場関係者の声あるいは報道機関の論評<sup>注2</sup>などの話を総合すると、一つは盛漁期以外の稼働率が低下する期間においてその空白をどうするか、もう一つは製造に注力する反面、販売へ力を入れる意識や姿勢が弱いということ課題にしているようである。稼働率課題に関しては原料不安が拍車をかけており、道漁連の神原氏も触れたように“高次加工への取り組み”や多品種加工など通年操業へのもくろみについて議論がありその意義を評価したい。その一方、販売課題については、大手企業や市場大卸などいわゆる有力販売筋へ任せきりにしてしまう体質が特に北海道で目に付く問題であるとして内外から指摘されている。それはすなわち外部(市場)情報を感知し(企業)組織内に転写し速やかに柔軟に実行する力が比較的弱いということを表現したものであり、内部組織として見過ごしてはならない課題であるにもかかわらず、当日の議論の中では取り上げられることはなかった。空白期の稼働率対策として取り上げられた高次加工への取り組みとその企画、あるいは多品種加工への転換などの成否もまた(企業)組織内の情報疎通と行動柔軟性に左右されるものであることを考えると、この部分の議論は手つかずのまま本大会(網走大会)へ持ち越された重要な論点のひとつではなからうか。

その点、平館報告で紹介された入福福田商店のMD提案への取り組みに対しても研究集会として社員の意識変化という論点も加える必要があったのだと思う。データを提示しながら提案あるいは管理を実行していくことは、その行為と成果は先駆的であるが、我々議論する側としてはその技術的な評価だけではなくこれまで社員個々人の中に蓄積された暗黙的な知識あ

るいは意欲がMD提案を推進する過程でどのように効果的に変質を遂げ、そして業績の改善に貢献したのか。つまり市場(取引)に対する社員の意識がどう変わり、どう企業の力が向上したのかについても議論すべきだったのではないかと思うのである。

私自身、公設の試験研究機関に勤務する中でシステム設計であるとかデータの分析や提示自体が評価の基準になると思ってしまい、ついつい知識や意識のプロモーションというかその重要な要素を忘れてしまう。その意味で図らずもふっと『現実』に引き戻され、自らを省みる良い機会に恵まれたと感謝しております。

注1 「週間水産新聞」5月17日、24日版に掲載

注2 「食品速報」2003年1月21, 22, 23, 24, 30日掲載「北海道商法(1)～(5)」あるいは2002年6月19日掲載「低迷表面化の函館水産業界の明日」などを参照

## 漁業経済学会「漁協シンポ」の感想－これからの議論を模索する－

廣吉勝治(北大水産)

さる5月29日、「漁協経営問題の現状と展望」をテーマとして漁業経済学会(東京)のシンポジウムが開催された(於:中央水産研究所)。コーディネーター加瀬和俊氏(東大)の基調的講演、馬場治(海洋大)・浜野節夫(ひやま漁協)・佃朋紀(魚価安定基金)・浜本俊策(香川県)の四氏の各論的講演があり、また討論に先立ち加瀬氏から適切な解題・論点整理などが追加され、百名を超える参加者の中からの議論も活発なものがあったと思う。当該シンポの総括は近いうちに整理された形で学会誌(漁業経済研究)に掲載される筈である。当該シンポの主催した者の一人として、今後の課題めいた個人的感想文を投稿させて頂く。

\* \* \*

沿岸漁業における地区漁協の位置、重要性は他の産業組合では見られない格別なものである。学会は漁協を巡る歴史変化の節目節目で集中的な検証・検討をしてきたが、現局面は文字通りの地区漁協の存続が色々な意味であやしくなっているとの認識の中で開催されたもので、それだけに問題解明は全面展開をすべしとの思いがあった。合併や事業統合の是非論・在り方論、組織・運動論、職員論、最近では「コーポレート・ガバナンス」等の統治論・アイデアも展開してみたい識者も少なくない学会である、地区漁協の存在の成否の鍵は事業、経営であって、シンポはこれを中心とすべしとの“スティック”な立場を堅持するものであった。

事業の中でも、単協の単独事業として成り立ち難いがゆえの、統合の方針で動いた多くの漁協信用事業問題はもはや信漁連の経営問題に移行したように見える。そうすると、地区漁協にとって信用事業を議論する意味はないのか、組合員の個別経営との結びつきが重視される漁協は統合した信用事業部門をどう位置づけようとするのか、単独で成り立たなくなったものを外に放り出して皆で支える方式にどんな価値を見出し得るのか、統合事業体である信漁連の経営実態の検討と併せ、整理してみる必要がある。

販売事業は今後も漁協の中心的事業であり続け得るのか、産地市場中心の販売事業問題は統合産地市場問題へと移行した感があるが、仮にそうだとした場合でも20億円程度の規模の

経済ミナム設定に意味があるのか。魚介類の販売事業が多様化せざるを得ず、産地消費地の垣根が低くなる傾向にあり、末端との取引も導入され推奨される状況において、水産庁や系統指導部が提起した産地市場の類型論・形態論はペダンティックな感じが強い。産地流通も消費の多様化と、物流の組立を伴った末端の買い手優位に対応して行かざるを得ない。私は演者・佃氏のところが把握している漁協の販売事業の多様な展開を、機能再生が必要な中小産地市場の「ネットワーク形成」の中で再編していくところにひとつの方向があると思っている。成り行き任せにしている、産地機能を失いつつある荷捌所経営は展望がない。販売事業は合併によって再生再編できるほど甘くはない。

今回議論しなかった購買事業に検討の論点はないのか。燃油を中心とする資材購買、生活購買いずれも旧態依然とした感じが強く、未来が見えてこない。松前の有力な高齢一本釣り漁業者に誘われて久しぶりに沖釣りに出掛けることとなった去年の経験であるが、彼は関係資材をまちの釣具店から既製品を中心に購入していると教えてくれた。他の組合員もそうするという。そちらが安いし品数も多いしサービスもいいという。周知のように、漁協の周囲には顧客の獲得競争とマーチャンダイジングで末端流通産業がしのぎを削っている。油も生活用品も調達の便を欠く僻遠の漁村において漁協の購買事業が役割を果たせた時代は過ぎた。漁業者に安く質のいい商品やサービスを提供する活動と位置づけ、意識的な購買事業を追求する漁協を私はよく知らない。当該事業の組合員にとっての利活用、収益性の評価、競争的な利益確保等という観点からも検証をやるべきと思う。購買事業は信用事業同様、いずれは歴史的使命を終える方向なのか、現場でも危機感が薄いように思われる。

共済事業は相当伸び盛りで有望だという。自営業者として福祉や老後への関心は高い。しかし、これからはっきりしない。共済の伸びている要因において、事業利益を確保する営業活動が見えてこないし、保険事業元の代理業務で手数料が稼げる事業ということだけでは組合員の暮らしと結びついた独自性のある事業にはならない。漁協には保険や福祉活動の専門家がいない。

\* \* \*

組合員の存在に依拠するという漁協の独自の立場を捨て去る訳にはいかないと思うが、その他漁業自営事業、製氷・冷凍・加工事業、及び観光や遊魚等のように新しく取り組まれる事業についても検討はこれからである。県一漁協を目指そうというときの事業の取り組みの在り方も未知である。合併・事業統合再編の中で、漁協事業の未来を規模論にのみあずけることは出来ない。組合員の存在形態の立場に立てば、地区漁協が独自性を発揮して生き残るには選択的な縮小再編、或いは拡大再編の方向も提示されるべきと思う。

北日本漁業経済学会事務局：北海道大学水産学部  
経営経済情報教室 〒041-8611 函館市港町3-1  
TEL.&FAX 0138-40-8835  
(学会のホームページは検索エンジンから入れます)

